Osaka University Knowledge Archive

Title	連体助詞を伴う名詞被覆形による擬古的複合名詞
Author(s)	蜂矢, 真弓
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2007, 41, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12306
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

連体助詞を伴う名詞被覆形による擬古的複合名詞

蜂　矢　真　弓

一　はじめに

有坂（一九三一）は、上代の名詞・動詞において、

(a)エ列イ列に終る形はそれが単語の末尾に立つ場合にも用ゐられ得るもの

(b)ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がついて一語を作る場合にのみ用ゐられるもの

として(a)を「露出形」、(b)を「被覆形」と名付けた。その上で筆者は前稿（二〇〇六a）において、複合名詞の前項部の場合について、有坂が述べている上代の「被覆形」・「露出形」と、平安時代以降の被覆形形態素・露出形形態素とを合わせて被覆形・露出形として扱い、被覆形・露出形の様相について考察した。

本論文では、前稿（二〇〇六a）で調査の対象としなかった、名詞被覆形による「被覆形＋連体助詞＋名詞」という形態について検討する。[1] 前稿（二〇〇六a）と合わせて、名詞被覆形・露出形の様相をより明らかにすることが、本論文の目的である。

調査対象とする名詞被覆形―露出形は前稿（二〇〇六a）と同様に、二音節の被覆形―露出形は①二七種類・②一四種類の合計四一種類、一音節の被覆形―露出形は①三種類・②三種類・④三種類の合計九種類とする。(2)

二　「被覆形＋連体助詞＋名詞」の様相

「被覆形＋連体助詞＋名詞」の用例について見てみると、その様相は、通時的に見た時に四種に分けられる。

1　無変化型：「被覆形＋連体助詞＋名詞」から他の形態に変化しないもの

2　連体助詞着脱型：「被覆形＋連体助詞＋名詞」―「〔同じ〕被覆形＋〔同じ〕名詞」

3　露出形対応型：「被覆形＋連体助詞＋名詞」―「〔被覆形に対応する〕露出形＋連体助詞＋〔同じ〕名詞」

4　連体助詞着脱・露出形対応型：「被覆形＋連体助詞＋名詞」―「〔被覆形に対応する〕露出形＋〔同じ〕名詞」

変化しない1に対し、変化するものにはまず2・3があり、2・3の混合型として4があるということである。そして、このうち2・3・4については、それぞれ以下の二類がある。

2a　「被覆形＋連体助詞＋名詞」↓「〔同じ〕被覆形＋〔同じ〕名詞」

2b　「被覆形＋連体助詞＋名詞」↑「〔同じ〕被覆形＋〔同じ〕名詞」

3a　「被覆形＋連体助詞＋名詞」↓「〔被覆形に対応する〕露出形＋連体助詞＋〔同じ〕名詞」

3b　「被覆形＋連体助詞＋名詞」↑「〔被覆形に対応する〕露出形＋連体助詞＋〔同じ〕名詞」

4ａ　「被覆形＋連体助詞＋名詞」↓「〔被覆形に対応する〕露出形＋〔同じ〕名詞」
4ｂ　「被覆形＋連体助詞＋名詞」↑「〔被覆形に対応する〕露出形＋〔同じ〕名詞」

こちらも同様に、2ａ・3ａの混合型が4ａ、2ｂ・3ｂの混合型が4ｂとなる。

そのうち2ａ・3ａ・4ａは、しいて言うならば自然な「変化」であると考えられる。まず、2ａについては、後から連体助詞が挿入されるのは自然ではないので、連体助詞が脱落する方が自然な「変化」であると思われる。次に、3ａについても、前稿（二〇〇六ａ）の第三節・第四節に述べたように、基本的に時代が下るにつれて被覆形の勢力が弱くなっていき露出形の勢力が強くなっていくこと、及び、複合語の前項部が同じ語の被覆形と露出形の両方をとる例において、被覆形の例の後に露出形の例が出現するということから、「被覆形→露出形」も自然な「変化」であることが分かる。そして、4ａは2ａ・3ａの混合であるので、同様であると見られる。

それに対し、2ｂ・3ｂ・4ｂの「被覆形＋連体助詞＋名詞」は、擬古的な表現をするために2ａ・3ａ・4ａの「変化」のシステムに「類推」した意図的な表現であると考えられる。「類推」は「変化」よりも後になるため、後に例を挙げるように、2ｂ・3ｂ・4ｂの「被覆形＋連体助詞＋名詞」の出現は時代が下り、基本的に江戸時代以降に出現する。

このように分類すると、2ａ・3ａ・4ａの「変化」は、それぞれ2ａ「連体助詞脱落型」、3ａ「露出形変化型」、4ａ「連体助詞脱落・露出形変化型」と呼ぶことが出来、2ｂ・3ｂ・4ｂの類推は、それぞれ2ｂ「連体助詞装着型」、3ｂ「被覆形類推型」、4ｂ「連体助詞装着・被覆形類推型」と呼ぶことが出来る。

そして、2a～4aに分類される例は以下の通りである。

2a　〔連体助詞ナ〕

マナジリ〔眦・眥〕→マジリ〔眦・目尻〕[3]、マナカブラ〔眶〕→マカブラ、

マナブタ〔瞼〕→マブタ〔瞼・目蓋〕

〔連体助詞ノ〕

コノクレ〔木暗・木暮・木晩〕→コグレ〔木暗・木暮〕、イナノホ〔稲穂〕→イナホ

3a　〔連体助詞ノ〕

コノハ〔木葉〕→キノハ、コノミ〔木実〕→キノミ、コノメ〔木芽〕→キノメ

4a　該当無し

では、「変化」の例についての検討は別の機会に述べることにして、本論文では、まずは「類推」の2b・3b・4bについて考察することにする。その結果、以下の通り、4bのみ、該当する例があった。[4]

4b連体助詞装着・被覆形類推型

〔連体助詞ナ〕

タナクビ〔手頸〕←テクビ〔手首・手頸〕

…郎黨四五人、物蔭より走り出て、忠重が左右の手首を、しかと捉て動せず、…

（曲亭馬琴『椿説弓張月』後篇巻之二　第十九回）

Tecubi　テクビ（手首）　手首.（『邦訳日葡辞書』）

タナモト〔手元〕↑テモト(5)

折しもあれ一團の燐火、叢の中より燃出て、手元を照らすにぞ、秋の螢か鬼火かと怪しみながら、やうこそあらめとて驚たまはず。（曲亭馬琴『椿説弓張月』後篇巻之六　第廿九回）

八尺余りの金さい棒の八角なるを手元二尺ばかり丸めて、誠に軽げに引つ下げたり。

（土井本『太平記』巻八）

タナサキ〔手先〕↑テサキ

さのみ逃脚すみやかに、わが手先を逸れぬとも、天なる父のあざけりを、聞きのがるべき汝が身かは。

…（薄田泣菫『二十五絃』「天馳使の歌」「なかだえ」）

手先（『文明本節用集』）

マナサキ〔面前〕↑メサキ

義成是をうち聞て、件の生拘技太郎を、そが侭面前に牽居させて、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯巻之三十四下　第百五十八回）

其時は我三歳なれ共、面影は目先に殘り、見覺有眉間のほくろ、隠してもかくされまじ。

（浄瑠璃『一谷嫩軍記』）

これらの用例は、江戸時代以前に存在していた「被覆形＋連体助詞＋名詞」の例に類推して、「露出形＋名詞」

を元に、江戸時代以降に「被覆形＋連体助詞＋名詞」の形態を作り出したものと捉えられる。

そして、江戸時代以降に作り出された「被覆形＋連体助詞＋名詞」の形態の例は、4bのみでなく、実は1無変化型としておいたものの中にもある。よって、このような1の例を、「類推」によるものということで1bとし、それ以外の1の例を1aとすることにする。では、以下に1bの例を挙げる。

1b

〔連体助詞ナ〕

タナユビ〔手指〕

…五扁唱（いつたびとなへ）てしづやかに、手指左右（たなゆびさゆう）に相組（あいくん）で、その間（あはひ）よりこれを見れば、…

（曲亭馬琴『椿説弓張月』後篇巻之一　第五十八回）

タナマタ〔手股〕

…遽（いそがは）しく手をさし伸（のべ）て、件（くだん）の珠を受（うけ）んとせしに、珠は手股（たなまた）を漏（もり）て、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第二輯巻之三　第十六回）

タナナカ〔手中〕

…緩（ゆる）くは握れど、きみが掌中（たなか）には、盡（つき）ぬ終（をは）らぬ平和（へいわ）と至善（しぜん）…

（北村透谷『蓬莱曲』第三齣　第一場「仙姫洞」）

マナウチ〔眼中〕(6)

…或は人千金の、利をもて求ることありとも、この虎の眼中に、聊も点すべからず。

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯巻之二十六　第百四十一回）

マナウヘ〔眼上〕(7)

…掻抓み、「耶」と声かけて、眼上約莫一丈あまり、蹴鞠の像く投たりしを、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯巻之十二下　第百十五回）

マナサヤ〔目鞘〕

…これより後は由断せず、目鞘外して護る程に、そがほとりへもよらせねど、

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第三輯巻之二　第二十四回）

マナソコ〔眼窩〕

世間の婦人ハ眼窩に入らざれども、此の才女の爲めにハ心を動かさゞるを得ず。

（末廣鐵腸『政治小説雪中梅』下編　第一回）

マナナカ〔眼中〕(8)

…かたくは閉づれどきみが眼中には、不老不死の詩歌と權威をあつむるとぞ見ゆる…

（北村透谷『蓬莱曲』第三齣　第一場「仙姫洞」）

マナウラ〔眼裏〕

だが眼裏の奥に揺曳している父娘の残像が、どうしても拭い去れなかった。（沢田ふじ子『天涯の花』）

〔連体助詞ノ〕(9)

コノエ〔木枝〕

…樹枝を折て鞭としつ、繋置れし鑑尬児們を、鞭撻責ん、と立蒐れば、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯巻之七　第百四回）

コノエダ〔木枝〕

…被たる襦袗の片袖の、樹枝に縢みて断離れしを、そが侭にして逃亡たる、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第八輯巻之五　第八十四回）

コノミキ〔木幹〕

…晋五は嚮に道節に、射られて虜になりし折、谷山の麓なる、樹幹に杻結着られて、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯巻之二　第九十五回）

これらの例は、４ｂのように元となる「露出形＋名詞」がある訳ではないが、三単語である「〈露出形〉＋〈連体助詞〉＋〈名詞〉」から作り出したものである。例えば、「タナユビ〔手指〕」を例に挙げて説明すると、三単語「テノユビ（手の指）」を念頭に置いた上で「タナユビ〔手指〕」という形態を作り出したということである。因みに、「テノユビ（手の指）」のような例があると、１ｂではなく３ｂ被覆形類推型のようにも見えるが、「テノユビ（手の指）」のような例は、あくまで三単語であって複合語ではないので、３ｂではなく１ｂの所属となる。

三　「一音節ア列＋ナ＋名詞」と「コ＋ノ＋名詞」

4b連体助詞装着・被覆形類推型および1bの例を見ると、「一音節ア列＋ナ＋名詞」・「コ＋ノ＋名詞」の二種類の形態が見られる。そこで、まずは「一音節ア列＋ナ＋名詞」の形態について考えるために、連体助詞「ナ」についての辞書の解説を見てみる。

「の」の母音交替で、（略）奈良時代にすでにわずかしか用いられないもので、後世は、いくつかの名詞に固定的に使われただけであった。（『岩波古語辞典』「基本助詞解説」の「な」の項）

手（テ）・目（メ）の交替形タ・マ、瓊（ニ）・神（カミ）の交替形ヌ・カムなど単独では使用されない語形につくことがしばしばあり、上代において既に固定して語構成要素化していたと思われる。（『時代別国語大辞典上代編』の「な」の項）

これらによると、連体助詞「ナ」は、名詞の被覆形に付くことが多く、上代語において語構成要素としてのみ存在していたということである。そこで、辞書の記述を受けて、連体助詞「ナ」が露出形に付いて語構成要素として存在した例を探してみたところ、一例も見付からなかった。このことから、「被覆形＋ナ＋名詞」という形態はあるが、「露出形＋ナ＋名詞」という形態はないということが分かる。

筆者は、前稿（二〇〇六a）において、名詞被覆形による複合名詞の前項部の場合について、被覆形と露出形の異なり語数と延べ語数の表を作って検討し、時代が下ると共に、被覆形の勢力が弱くなっていき、露出形の勢力が

強くなっていくことを明らかにした。このことを、「被覆形＋ナ＋名詞」はあるが「露出形＋ナ＋名詞」はないということと合わせて考えると、連体助詞「ナ」は、露出形よりも古い被覆形に下接する古い連体助詞であることが分かる。よって、4b・1bの「一音節ア列＋ナ＋名詞」は、擬古的な表現をするために、過去に存在した古い連体助詞「ナ」を用いたものと考えられる。

さらに、連体助詞「ナ」に上接する被覆形について考えるために、詳細については別稿に述べたいが、1a・2a・3a・4aにおける「名詞被覆形＋ナ＋名詞」の形態の例を見ると次のようである。

タ〔手〕……タナスエ〔手末〕・タナソコ〔手底・掌〕・タナウラ〔掌中・掌〕・タナゴコロ〔掌〕

マ〔目〕……マナカヒ〔眼間・目交〕・マナカミ〔目上〕を・マナコ〔眼〕

／マナジリ〔眦・眥〕・マナカブラ〔眶〕・マナブタ〔瞼〕

ヌ〔瓊〕……ヌナト〔瓊音〕（↑ヌナオト）・ヌナヰ〔渟名井〕

これを見ると、右の連体助詞「ナ」に上接する被覆形は、主に一音節ア列であることが分かる。そのため、擬古的な表現をする際に、「一音節ア列＋ナ＋名詞」という形態が用いられたものと思われる。

次に、「コ＋ノ＋名詞」の形態について考える。筆者は、前稿（二〇〇六b）において、露出形「キ〔木〕」に対する被覆形「コ〔木〕」の勢力は、室町・戦国時代に完全に逆転されると述べた。このことから、江戸時代以降、「コ

〔木〕」は「キ〔木〕」よりも古いものという意識が徐々に芽生え始め、その結果、擬古的な表現をするために「コ〔木〕」が用いられたものと思われる。

一方、用いられた連体助詞が「ノ」であった理由について考える。「一音節ア列＋ナ＋名詞」のように、古い連体助詞「ナ」を用いた方が、より擬古的要素が強まるはずである。そこで、一音節オ列に下接する連体助詞について考えるために、1a・2a・3a・4aにおける「一音節オ列＋連体助詞＋名詞」の形態の例を見ると次のようである。

コ〔木〕……コヌレ〔木末〕（↑コノウレ）・コノシタ〔木下〕・コノハナ〔木花〕・コノマ〔木間〕
・コノモト〔木下〕
／コノクレ〔木暗・木暮・木晩〕／コノハ〔木葉〕・コノミ〔木実〕・コノメ〔木芽〕

ホ〔火〕……ホノホ〔炎〕

このように、一音節オ列の被覆形に下接する連体助詞は「ノ」のみである。故に、「コ」に下接する連体助詞は「ノ」のみであることから、「コ＋ノ＋名詞」という形態が用いられたものと思われる。

では、最後に、「類推」における「一音節ア列＋ナ＋名詞」と「コ＋ノ＋名詞」とを比較する。この二つの形態において、擬古的要素は、それぞれ〈連体助詞「ナ」〉と〈被覆形「コ〔木〕」〉である。よってこの二つを比較してみる。

〈連体助詞「ナ」〉は、上代にのみ語構成要素として存在していたもので、平安時代には衰退してしまっていたものである。江戸時代以降では、完全に過去のものという意識になる。それに対し、〈被覆形「コ〔木〕」〉は、室町・戦国時代以降勢力が弱まっていくだけであって、江戸時代以降も現代に至るまでずっと存在している。〈連体助詞「ナ」〉に比べれば、あまり過去のものという意識にはならない。よって、「一音節ア列＋ナ＋名詞」の方が「コ＋ノ＋名詞」よりも擬古的要素が強く、そのため、「一音節ア列＋ナ＋名詞」は、江戸時代～近・現代の六文献において4b・1bの一三例があるのに対し、「コ＋ノ＋名詞」は、江戸時代の一文献において1bの三例があるのみという結果になったものと考えられる。

注

（1）「被覆形＋連体助詞＋名詞」という形態の用例には、出現する文献の傾向があまり見られないようである。それで、『日本国語大辞典　第二版』、国文学研究資料館の日本古典文学本文データベース、『新編国歌大観』CD－ROM版Ver.2（角川書店）を中心に調査した上で、その他の文献についても調査することにした。

（2）前稿（二〇〇六a）では、有坂（一九三一・一九三四）と川端（一九七九）が挙げている①ア列―エ列乙類、②ウ列―イ列乙類、③オ列甲類―イ列乙類、④オ列乙類―イ列乙類の被覆形―露出形のうち、（1）被覆形が形容詞の語幹でもあるもの、（2）被覆形・露出形の両方に固有名詞の用例しかないもの、（3）被覆形が、動詞の被覆形であるもの、（4）少なくともどちらか一方が、単独、または複合語の後項部の例のみであるもの、（5）露出形の語末の母音が甲類であるもの、（6）その他、を除くこととし、その結果、調査対象とする名詞被覆形―露出形を以下の通りとした。なお、（1）により「クロ〔黒〕―クリ〔涅〕」を調査対象外としたことによって、明らかに有坂（一九三一・一九三四）の③に該当するものはないことになった。甲乙不明のため③・④のどちらであるかが分からないものについては、④に含めてある。（波線部は一音節の被覆形―露出形）

①アマ〔天〕―アメ、アマ〔雨〕―アメ、ウハ〔上〕―ウヘ、ウラ〔末〕―ウレ、カガ〔影〕―カゲ、カザ〔風〕―カゼ、カナ〔金〕―カネ、サカ〔酒〕―サケ、スガ〔菅〕―スゲ、タタ〔楯〕―タテ、ツマ〔爪〕―ツメ、タ〔手〕―テ、フナ〔舟〕―フネ、マラ〔稀〕―マレ、ムナ〔胸〕―ムネ、マ〔目〕―メ／イナ〔稲〕―イネ、カ〔毛〕―ケ、コワ〔声〕―コヱ、サナ〔核〕―サネ、タカ〔竹〕―タケ、タタ〔縦〕―タテ、タナ〔種〕―タネ、ツマ〔頭〕―ツメ、ナハ〔苗〕―ナヘ、ニハ〔贄〕―ニヘ、ヒラ〔領巾〕―ヒレ、ヤカ〔家〕―ヤケ、ヨナ〔米〕―ヨネ、ワサ〔早稲〕―ワセ

②ウツ〔内〕―ウチ、カム〔神〕―カミ、クツ〔口〕―クチ、クル〔栗〕―クリ、サツ〔獲〕―サチ、ツク〔月〕―ツキ、ツク〔槻〕―ツキ、ヌ〔瓊〕―ニ、ム〔身〕―ミ／カブ〔芽〕―カビ、ク〔茎〕―クキ、クス〔串〕―クシ、クヌ〔国〕―クニ、タブ〔粒〕―タビ、ツ〔茅〕―チ、ツク〔調〕―ツキ、ツブ〔粒〕―ツビ

④コ〔木〕―キ、ホ〔火〕―ヒ／ノ〔荷〕―ニ

また、用例を採取する際にも、前稿（二〇〇六a）同様、被覆形または露出形の部分が確例でないもの、固有名詞は採取しない。

（3）「メジリ〔目尻・眥〕」については別の機会に述べることにする。

（4）3bの形式に当てはまる例として、「コノミチ↑キノミチ」があるが、「コノミチ」は以下の一例のみで、「キノミチ」と同じ意味であるかどうかが判断出来ないので検討の対象としないことにする。

コノミチ〔木道〕「木道（コノミチ）」（『書言字考節用集』第四冊（人倫四））

キノミチ「つくもつかさのたくみのさま〳〵きのみちをえりすへたる様にのみ。」（『民部卿家歌合　建久六年正月廿日』）

（5）本来「タモト」は①手の届く辺り・②袖の両方の意味を表していたが、下ると分化して「タモト」が②、「テモト」が①の意味を表すようになり、その後①の意味を表す「タナモト」が発生した。一見「タナモト」は2bにも所属するように見えるが、このことから、①の意味を表す「タナモト」は4bのみの所属であるということが分かる。

タモト〔袂〕「秋の野の草のたもとか花す、きほにいでてまねく袖とみゆらん」（『古今和歌集』巻第四　秋歌上　二四三　ありはらのむねやな）

（6）「ウ」の脱落形「マナチ」の例もある。

マナチ〔眼内〕「…幾番となく眼包を拊れば、撫るまに〳〵銷然と、眼内の邪熱退冷て、…」（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第八輯巻之二　第七十六回）

（7）「メウヘ」という例もあるが、「マナウヘ」と「メウヘ」は意味が異なるため「マナウヘ」は1bの所属となる。

メウヘ〔目上〕「いちこ「アイ〳〵目下かェ」妻「イェ目上でございます」」（『浮世床』二編上）

（8）「メナカ〔目中〕」という例もあるが、「マナナカ」とほぼ同時期の例である上に孤例であるため、「マナナカ」は4bではなく1bの所属にしておく。

メナカ〔目中〕「…女將の大きな目なかゞ、ギラ〳〵と潤んでゐるのに…」（里見弴『今年竹』「渡る風」七）

（9）1bに当てはまる例として「ツブノキ」があるが、「ツブ〔粒〕」が被覆用法だけでなく露出用法も持っているため、「ツブノキ」は三単語である可能性があることから検討の対象としないことにする。

ツブノキ〔粒木〕「木槲樹レ毛出」（『書言字考節用集』第六冊）

【使用文献】

『椿説弓張月』（日本古典文学大系　岩波書店）、『邦訳日葡辞書』（岩波書店）、『土井本太平記　本文及び語彙索引』（勉誠社）、『土井晩翠　薄田泣菫　蒲原有明集』（明治文学全集58　筑摩書房）、中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引』（勉誠社）、『南総里見八犬伝』（新潮日本古典集成別巻　新潮社）、『海音寺潮五郎出雲宗輔傑作集　全』（有朋堂書店）、『北村透谷集』（明治文学全集29　筑摩書房）、『明治政治小説集（二）』（明治文学全集6　筑摩書房）、『天涯の花――小説・未生安一甫』（中央公論社）、中田祝夫・小林祥次郎『書言字考節用集研究並びに索引』（勉誠社）、『続群書類従第十六輯下　和歌部』（続群書類従完成会）、『古今和歌集』（日本古典文学大系　岩波書店）、『浮世床　四十八癖』（新潮日本古典集成）、『今年竹』（プラトン社）

【使用辞書】

『日本国語大辞典　第二版』（小学館）、『岩波古語辞典　補訂版』（岩波書店）、『時代別国語大辞典　上代編』（三省堂）

【参考文献】
有坂秀世　（一九三一）「国語にあらはれる一種の母音交替について」
（一九三四）「母音交替の法則について」（『国語音韻史の研究　増補新版』一九五七　三省堂）
川端善明　（一九七九）『活用の研究』Ⅱ（一九九七　清文堂出版）
鈴木丹士郎　（二〇〇三）『近世文語の研究』（東京堂出版）
蜂矢真弓　（二〇〇六a）「名詞被覆形・露出形の型の通時的相違」（『国語語彙史の研究』二十五）
（二〇〇六b）「名詞被覆形「コ〔木〕」の様相」（『語文』第八十六輯）

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Archaic Compound Noun Which Contains Covered Form with Noun-Attributive Particle

Mayumi HACHIYA

I search "covered form + noun-attributive particle + noun".

Before the Edo period, some of them were replaced with "covered form (hifuku-kei) + noun" or "bare form (roshutsu-kei) + noun-attributive particle + noun".

On the other hand, I find some examples that they were used instead of "bare form + noun" etc. to express archaically during the Edo period and after.

These examples can be divided into two types-type ① is "one mora of column (retsu) 'a' + 'na' + noun" and type ② is " 'ko (木)' + 'no' + noun".

Noun-attributive particle 'na', which had already lost substance until the Nara period, was used to express archaically, and only covered form which is connected to the front of noun-attributive particle 'na' is one mora of column 'a'. So type ① seemed to be analogized.

Meanwhile, covered form 'ko' came to be less uesed than bare form 'ki (木)' before the Edo period. So covered form 'ko' was used to express archaically, and type ② seemed to be analogized.

Here note that covered form 'ko' exists down to the present whereas noun-attributive particle 'na' had declined until the Nara period. Therefore noun-attributive particle 'na' is more archaic. I think that type ① has more examples and appears in more documents than type ② as a result.

キーワード：被覆形，露出形，連体助詞，擬古，類推